

食個体の近くに留まり、個体が去った後に残された破片を拾い食いする行動が頻繁に観察され、クルミへの執着心が伺われた。今回はクルミの落下時期との関係は明らかにならなかった。

クルミを割るには顎の力や大きさが関係していることは明らかだが、ワカモノでもクルミの硬さや大きさを選択することによって割ることが可能であった。ただし、割れるまでにより多くの時間を要した。

5 野生ニホンザルにおける卵巣周期および発情行動の地域間比較

藤田志歩 (山口大・農)

野生ニホンザルメスの卵巣周期や繁殖成功は、個体の産歴や栄養状態といった内的要因だけでなく、食物の豊凶や社会性比といった環境要因および社会的要因の影響も受ける。しかしながら、これらの要因がメスの卵巣周期や発情行動に及ぼす影響について、実証的なデータはほとんどない。そこで本研究は、生息環境および社会構成の異なる2つの野生ニホンザル集団において、糞中ホルモン動態によるメスの卵巣周期と発情行動の発現パターンを比較した。宮城県金華山島および鹿児島県屋久島に生息するニホンザルのメスを対象に、それぞれ2年間の調査を行った。その結果、金華山では、のべ15頭中12頭のメスで排卵が確認され、そのうち9頭は初回排卵で受胎し(75%),1頭は2回目以降の排卵で受胎した(8.3%)。いっぽう、屋久島では、10頭全ての対象メスにおいて排卵がみとめられたが、そのうち初回排卵で受胎したメスは2頭であり(20%),4頭は2回目以降の排卵で受胎した(40%)。また、金華山では、受胎後に射精を伴う交尾行動は全く見られなかったのに対し(0%),屋久島では、受胎した6頭のうち4頭で受胎後の交尾が見られた(66.7%)。屋久島のメスにおいて初回排卵で受胎しにくい理由は、メス側、オス側、あるいは両者における何らかの生理的要因が考えられる。また、交尾行動の発現パターンにおける両地域の違いについて、気候条件が温暖で、食物環境の比較的豊富な屋久島では、エネルギーを要する交尾行動の発現が環境要因によってあまり拘束されず、卵巣周期と交尾行動との関連性が比較的弱いことが示唆された。

6 大型類人猿における非侵襲的ストレス評価を目的とした糞中コルチゾール測定系の確立

川村誠輝 (山口大・農)

エコツーリズムは野生大型類人猿の保護活動の一環として実施されているが、一方で、大型類人猿にストレスを与えることが危惧されている。本研究は、野外調査地でも実施できるストレス評価法を確立するため、非侵襲的試料を用いたコルチゾール濃度の測定系について検討した。第一に、冷蔵・冷凍設備のない野外調査地での糞試料の保存方法について検討するため、メタノール保存による方法と乾燥保存による方法を比較した。その結果、両保存法による測定値が有意な相関を示したため、野外調査地ではより簡便な乾燥保存が適することが確かめられた。第二に、糞中コルチゾール濃度によるストレス評価の妥当性を確かめるため、まず、平常状態における野生大型類人猿の糞中コルチゾールレベルを調べた。対象は日本モンキーセンター(JMC)および

王子動物園(OJI)のゴリラおよびチンパンジーとし、糞中コルチゾール濃度の種や性による違い、および飼育環境の影響についても検討した。その結果、糞中コルチゾール濃度は種や性別に関らず飼育環境によって異なり、OJIはJMCより高かった。さらに、OJIでは、チンパンジーはゴリラよりも高く、また、いずれの種もメスよりオスの方が高かった。一方、JMCでは種差および性差は認められなかった。したがって、糞中コルチゾール濃度によってストレスを評価するためには、環境や個体の属性を考慮し、ベースラインに基づいた変動を調べる必要があると考えられた。今後、糞中コルチゾール濃度と行動学的指標を用いて、実際に人からの働きかけが大型類人猿に与えるストレスについて調べる予定である。

7 自発的な身振り言語を用いたろう者によるコミュニケーションの研究

松本晶子 (沖縄大・人文), 小田亮 (名古屋工業大・院・工学)

沖縄に在住するろう者4名(男性2名,女性2名,年齢は60代後半から80代)について、日常会話における身振り言語を調査した。これらのろう者は就学経験がなく、自発的な身振りを発達させることによって、周囲とのコミュニケーションを行っている。対象のろう者と日常的に接している人との自由会話を録画した合計80分間の会話場面をデジタルビデオを用いて録画し、画像ファイルに変換した後に単語を単位として書き起こした。次に、単語を構成する手型を、米川(1984)に準じて分類した。その結果、すべてのろう者において、B手型、つまり指を広げたかたちの手型が最も多くみられた(36-56%)。これは、手型そのものが何らかの意味をもっているというより、腕全体、あるいは身体全体で動作をするときに、最も作りやすい自然な手型であるためであると考えられる。次に多かったのが、G手型、つまり握った状態から人差し指のみを伸ばした手型であった。これは、身振り言語において指さしが重要な役割を果たしているためであると考えられる。実際、1名を除いてG手型の40%から60%が指さしに使用されていた。これら以外の手型の出現頻度は低く、その傾向は4名に共通するものだった。B手型とG手型が多く使用されることは多くの手話言語においても知られており、手話言語が身振りの特徴を基にして発展してきたことを示唆するものである。

8 食物選択におけるマカク2種とチンパンジーの比較

森村成樹 ((株)林原生物化学研究所・類人猿研究センター)

動物福祉の立場から、雑食性の霊長類の飼育では様々な食物を給餌するのが好ましい。様々な種において、野生では100種以上の食物を採食するが、一時に様々な食物を食べようとするのかについて、多数の食物品目を同時に提示して利用品目数を調べた。雑食性で採食特性が異なるチンパンジー3個体とマカク2種(ニホンザルとアカゲザル)各2個体を対象に、1回の給餌(採食バウト内)と1日の給餌(日内)とでの採食品目数を比較した。条件1では、バナナ、オレンジ、トマト、キャベツ、ダイコン、条件2ではパイナップル、キ